

第4回 今後の幼児教育の教育課程、指導、評価等の在り方に関する有識者検討会

幼児教育と小学校以降の 教育とのつながりを巡って

上智大学 奈須正裕

1. すべての学校種を貫く学力論としての「資質・能力」
2. 個別最適な学びの原理としての「環境を通して行う教育」
3. ICTの利用と幼児教育の共通点としての「対面・非同期」

1. すべての学校種を貫く学力論としての「資質・能力」

学力論の2つの系譜

- ▶ 「内容」を基盤とした学力論

コンテンツ・ベース

「何を知っているか」

A問題的学力

- ▶ 「資質・能力」を基盤とした学力論

コンピテンシー・ベース

「何ができるか」

competencies=「有能さ」・・・対象や場面と適切に関われる

「どのような問題解決を現に成し遂げるか」

B問題的学力、PISA型学力 → 高大接続改革

コンピテンシーへの注目

- ▶ デイビット・マクレランドの発見:コンテンツ・テストの成績は将来の成功を予測しない(1970年代)
- ▶ 成功を予測した指標:達成への意欲、感情の自己調整能力、問題解決力、対人関係能力、コミュニケーション能力…

- ①優れた問題解決に必要な十分な要因=コンピテンシーによる学力論の再定義
- ②非認知能力の学力論への組み入れ要求
- ③汎用的認知スキル(思考力・判断力・表現力等)の重視
- ④知識・技能の質的改善:暗記的知識から活用の効く知識へ、要素的知識から統合化された知識へ

育成すべき資質・能力の三つの柱

学びに向かう力
人間性等

どのように社会・世界と関わり、
よりよい人生を送るか

何を理解しているか
何ができるか

知識・技能

理解していること・できる
ことをどう使うか

思考力・判断力・表現力等

乳幼児の発達研究から生まれた

- ▶ ロバート・ホワイト(1959年)によるコンピテンスの提唱
- ▶ 乳幼児は進んで環境に働きかけ、環境との相互作用を通して学び育つ
- ▶ 同様の現象が、精神的に健康な人間の一生涯に渡って認められる
- ▶ ホワイトにおけるコンピテンスの2つの意味
 - 1) 環境内の人・もの・ことに能動的に関わろうとする生得的な動機づけ的エネルギー要因
 - 2) そこから生まれる人・もの・ことと効果的に関われるという関係的で認知的な能力
- ▶ 「知る」とは、対象の特質に応じた適切な「関わり」が現に「できる」こと、さらに個別具体的な対象について「知る」(＝関われる)ことを通して、汎用性のある「関わり方」(シエマ)が洗練されていくこと
- ▶ 「知る」ことを駆動するエネルギー要因から、「知る」営みのメカニズムや、それを通して獲得される「関わり方」＝汎用的スキルまでをも包摂した概念として、コンピテンスは提起された

一生涯を支え続ける学力論の確立

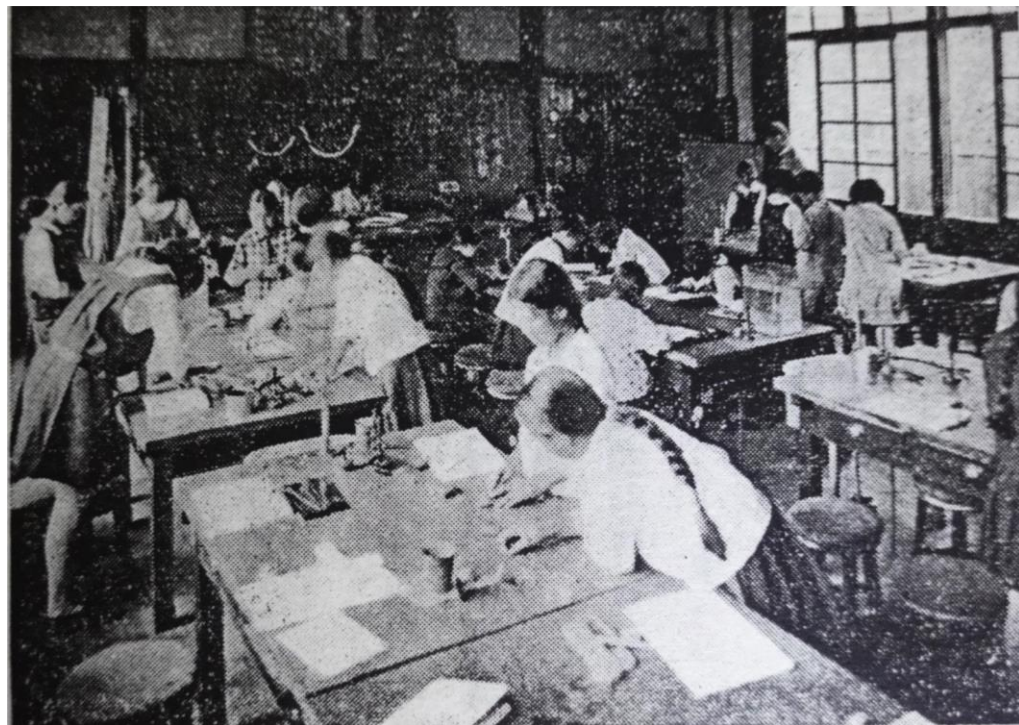
- ▶ 幼児教育はもっぱらコンピテンシーを育ててきた
- ▶ 生活科・総合的な学習の核もまた、コンピテンシー
- ▶ 特に「答え」のない問題に協働で立ち向かい、「正解」ではなく、その都度「最適解」を求め続けることの重要性
- ▶ 小学校以降の教科学力についても、資質・能力を基盤とすることに
- ▶ 大学入試でも、コンピテンシーの占める割合が高くなってきた
- ▶ 「最初学歴」としての幼児教育から小・中・高・大、さらに一生涯を支え続ける確かな「学力」としての、コンピテンシー＝資質・能力の育成

2. 個別最適な学びの原理としての 「環境を通して行う教育」

100年前に世界各地で誕生した個別最適な学びの源流



ドルトン・プラン(1920年代)



奈良女子高等師範学校附属小学校
「独自学習」(1920年代)

愛知県東浦町立緒川小学校(1980年代)



教える教育から環境を通して行う教育へ

- ▶ 全員の子供が教師の目の前にいない: どうやって教えるの?
- ▶ 適切な環境さえあれば、子供は環境に関わり学んでいく

教科書を時間軸から解き放ち、空間的に表現する



点を結んで

1年生：図形の構成



棒を使って



色板を組み合わせて

学習環境との関わりで自立的に学ぶ(6年社会科)



学習環境との関わりで自立的に学ぶ(6年理科)



教える教育から環境を通して行う教育へ

- ▶ 全員の子供が教師の目の前にいない: どうやって教えるの?
- ▶ 適切な環境さえあれば、子供は環境に関わり学んでいく
- ▶ もう1つの教育方法としての「環境を通して行う教育」
- ▶ 「教師が教える教育」に加えて「環境を通して行う教育」をレパートリーに
- ▶ その基底にあるのは、すべての子供は生まれながらにして「有能な学び手」という子どもも理解
- ▶ しかし、アナログでは膨大な紙の資料の準備など、学習環境整備のインシヤル・コストの高さがネックになっていた・・・

3. ICTの利用と幼児教育の 共通点としての「対面・非同期」

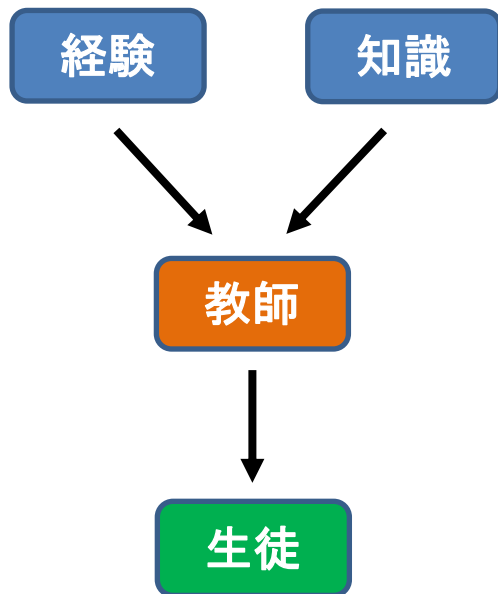
GIGAスクール構想で整備された一人一台端末と高速大容量ネットワークが学習環境整備の省力化と高度化を実現



子供同士で声をかけあい
自発的に展開する協働的な学び

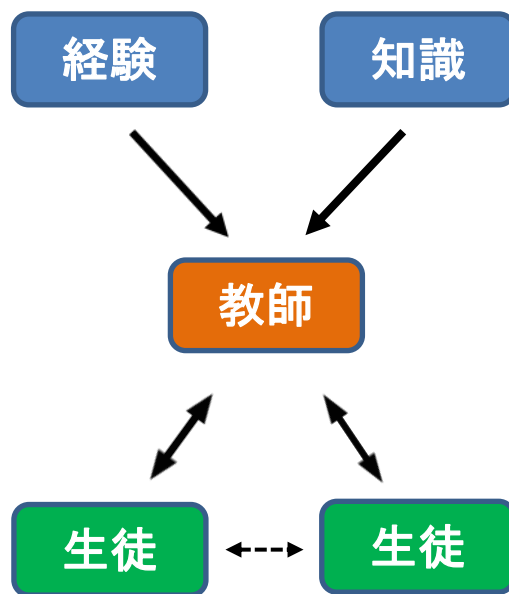


自分の学びに必要な情報を
個別的・自立的に取得



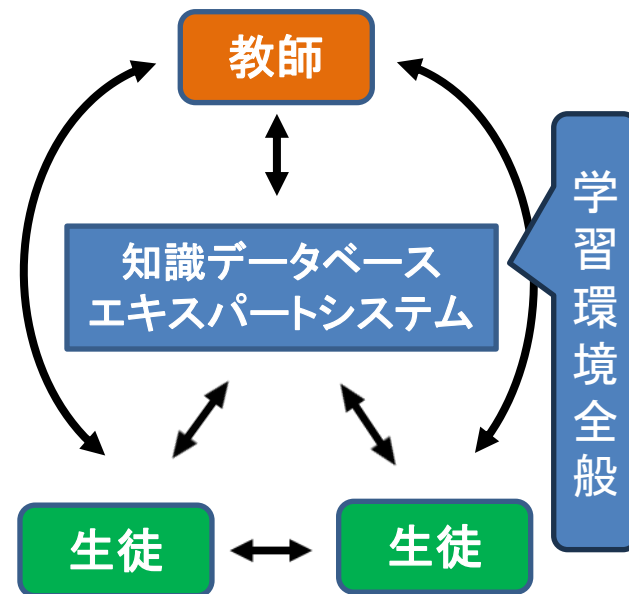
口頭継承パラダイム

口頭による教師の一方的な伝達



現在のパラダイム

情報の伝達者及びゲートキーパーとしての教師



情報技術パラダイム

知識データベース等に、生徒も教師も等しくアクセスできる

学校教育の過去・現在・未来のモデル (Branson, 1990)

Robert K. Branson 1990 Issues in the Design of Schooling : Changing the Paradigm. *Educational Technology*, Vol.30, No.4, 7-10.

⇒ 学習環境全般と考えることで、一般的な幼児教育のモデルに

同期型と非同期型 × 対面と遠隔

- ▶ デジタルが時間と空間の制約から授業を開放する
- ▶ 「同期型コミュニケーション」(電話型):
伝達側の都合で受け手側の時間を奪う
コミュニケーションの機会は1回のみ
- ▶ 「非同期型コミュニケーション」(メール・クラウド型):
伝達側は事前にまとめて情報を提供
受け手側は各自の都合とタイミングで何度でも情報を取得できる
- ▶ 「対面」に加えて「遠隔」が可能に

同期型と非同期型 × 対面と遠隔

	同期型 コミュニケーション	非同期型 コミュニケーション
対面	従来型の一斉指導	環境を通して行う教育 情報技術パラダイム
遠隔	オンライン授業など	オンデマンド授業など

小学校以降における子供観の転換と授業のパラダイムシフト ⇒ 幼小間、さらにそれ以降のなめらかな接続

- ▶ 子供は無能な怠け者：教師が仕切る教育
→ 教師が教えなければ学ばない、学べない
- ▶ 教師の仕事は教授と管理
→ 前提条件としての規律訓練



- ▶ 子供は有能な学び手：環境による教育
→ 適切な環境と出合えば、自ら進んで学ぶ
- ▶ 教師の仕事は学習環境整備と足場架け
→ 見とりと支援

